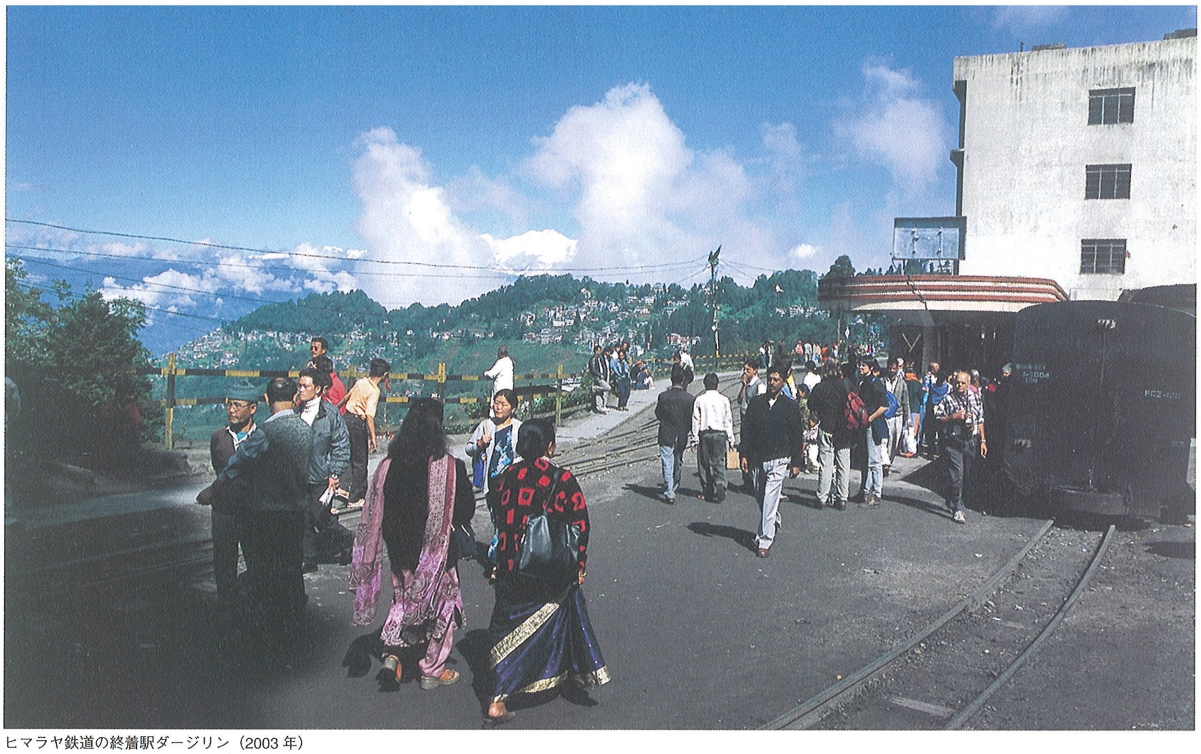
みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

ダージリンのネパール系インド人 (変わるネパールと変わらぬネパール : グローバル化した世界に暮らす, 第15回)

メタデータ	言語: ja
	出版者:
	公開日: 2014-03-26
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 南, 真木人
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5103



ヒマラヤ鉄道の終着駅ダージリン（2003年）

変わるネパールと変わらぬネパール

――グローバル化した世界に暮らす――

第15回

ダージリンのネパール系インド人

紅茶の産地として、またユネスコの世界遺産ヒマラヤ鉄道（トイ・トレイン）で有名なインドのダージリン。だが、その茶葉を摘んでいる人の多くがネパール系のインド人であることはあまり知られていない。1851年、イギリス東インド会社は当地で茶の栽培に成功し、次つぎに茶のプランテーションを開いて今日の礎を築いた。この時、安く豊富な労働力として雇用されたのが、何あろうネパールからの移住者であった。今日でもダージリン郡の人口の半分、約60万人はネパール語を母語とする人びとで占められる（1991年）。

2003年、私はダージリンを訪ね、銀のティーポットで出される紅茶を堪能しながら、ネパール人のなかのマンガル（マガール）という人びとから話を聞いた。インド全体で約10～20万人いるといわれるマンガル人は、前年全インド・マンガル人協会を設立していた。この協会の目的は、連邦政府にマンガル人を「指定部族」として認定させることにある。そうすれば、公務員の採用、高等教育機関の入学、投資の貸付などで「指定部族」の留保枠が充てられ、優遇されるからだ。そのためには自分たちがいかに後進で、かつ独自の伝統文化を維持しているかを示さなければならない。彼／女らはマガール語を話す地域にモデル村をつくり、ネパールのマガール協会本部に問い合わせては、マガールの「伝統」的な家屋、衣装、舞踊、祭礼を習い、自らの文化を再創造している。

「あなたのようなエリートが、後進イメージがつきまとう指定部族になることに躊躇はないのか？」という質問に協会の事務長はこう答えた。「ここは（民主主義の国）インドです。たとえ不可触カースト（指定カースト）の人でも高官は高官です。皆その人のいうことに従います。指定部族や指定カーストかではなく、その人の地位が重要なのです。マンガル人の向上のためには子弟が高等教育を受ける機会を増やすことが先決です」

これまでダージリンのネパール系インド人（ゴルカリ）は、連邦政府にダージリン・ゴルカ丘陵評議会の設置を認めさせ、一定の自治権を獲得してきた。1992年には、ネパール語を連邦の公用語に準ずる言語に指定させ、ゴルカリのプレゼンスを高めた。だが、現在、彼／女らは出身の民族やカーストごとに結集し、優遇措置の対象になることで自らの社会的な地位を向上させようと動きだしている。インドの政治化する民族運動は、ネパールの将来を占ううえでも看過できない。

写真・文◎国立民族学博物館助教授 **南 真木人**

1961年、札幌生まれ。筑波大学大学院修了。専門は文化人類学、南アジア研究。主要共著／『〈都市的なるもの〉の現在』（東大出版会 2004年）、『嗜好品の文化人類学』（講談社 2004年）、『エスノ・サイエンス』（京大出版会 2002年）など。